

## 新刊紹介

是住久美子

岡本 真 著

## 未来の図書館、はじめます

青弓社 2018.11  
208p 19cm 定価1,800円(税別)  
ISBN978-4-7872-0069-3

本書は、図書館プロデューサーとして各地の公共施設を手掛けてきた著者が、前著『未来の図書館、はじめませんか?』(青弓社 2014年)に続き刊行した図書である。主な読書対象として、新たに公共図書館の整備を検討することになった自治体職員、議員、住民らが、本書により図書館整備についての「勘どころ」を掴むことを目的として書かれている。図書館整備にあたり、何から着手し、各段階でどのように進めていけば良いかについて、具体的な事例を織り交ぜて説明してあり、前著と比較して「図書館をはじめる」ことに対して、より実践的な内容となっている。

第1章では、図書館をはじめめる準備として、今の図書館がどのような状況であるかを他館との比較や、書籍や雑誌の情報を元に把握すること、それから自治体の総合計画や個別計画、議会での議論を確認することの重要性について説いている。特に、住民にとっては、自分たちの考えを図書館整備に反映させようとするならば、これらの情報を積極的に入手し、図書館整備に関する議論がどのように進められてきて、今どの段階にあり、今後どのような方向で動こうとしているのかを理解することは必要であるだろう。

第2章では、自治体の中心市街地活性化を目的とした施策の核として図書館が位置づけられる傾向や、公共施設等総合管理計画による公共施設の再編成時に、図書館の集約化や他の施設との複合化が検討されるような、図書館整備の背景について述べられている。多くの自治体で少子高齢化による人口減少やそれに伴う財政悪化という、地域の危機を想定しているなかで、課題となっている移住・定住・交流人口の増加に図書館が貢献している例として鳥根県の海士町が挙げられている。このように、まちづくり

に図書館整備が注目される側面もあるいっぽうで、自治体内に図書館整備に関するノウハウが乏しく、その整備に関する業務が民間に委託されるケースが多い。その原因として、公務員の定数削減による継承機会の喪失や、公共建築の設計業務が特命随意契約から公募型プロポーザルへと変わり、図書館の建築設計を得意とする設計事務所が減少したことを指摘している。

第3章では、図書館整備の手法として、公的資金を原資として行う従来方式とPPPやPFIなどの民間活用方式、さらに第3の方式としての民設民営方式が紹介されている。現在整備が進められている新図書館の多くは、依然として従来方式が多いということだが、民間資金やノウハウを活用したPPPやPFI等による図書館整備が今後増えてくることも予想される。民間活用方式と言っても、様々な形態がある。先行して公共施設の整備に民間活用方式を導入した自治体の事例を把握しておくことも重要である。

第4章は図書館整備に関する、よくある質問に答える形式をとっている。この章で注目すべきは、市民参加による検討委員会やワークショップ等を通じた市民意見の集約法や市民協働に関する項目である。市民が図書館のあり方を「私たちごと」として捉え、考えることを重視し、アリバイ作りの検討委員会の設置やワークショップの開催とならないような工夫が紹介されている。市民が図書館整備を「私たちごと」と捉え、まちにとってどのような図書館が必要で、持続可能な運営のためにはどの程度の規模がふさわしいかを専門家とともに考え、実際に図書館が開館してからも、その運営を支援し続けるというのが理想である。

本書の内容は、民間事業者である著者にとってビジネス上のノウハウの一部を提供することにもなるが、厳しい財政状況の中であっても、人々の自由と権利を保障する機関である図書館は、様々な手法はあるが、自治体が責任を持って整備、運営していくべきという信念の元に書かれていることが感じられた。

今の図書館がどのような背景の中で存在しているのかを俯瞰的に確認するためにも、図書館で働く多くの人に読んでもらいたい一冊である。

(これずみ くみこ 田原市中央図書館)